

地域・調査研究会
—「知の創造」の場としての取り組み—

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程
前島 訓子

「地域・調査研究会」は、2001年7月に発足し、9年目を迎えます。この研究会は、既に終了した調査の結果の報告だけでなく、調査の中間報告やそれに基づいた報告をしていただき、共同討論が行えるような場を提供することで、「知の創造」をしていける場となることを目指してきました。実証的な社会学の調査をもとに、大学院生や研究者が研究発表をする場として毎月1回のペースで行ってきたこの研究会は、2010年9月時点で77回を数えることとなりました。この研究会では、通常の限られた時間で行う学会報告とは異なり、報告に1時間、集まっていたいただいた様々な分野の院生や研究者との質疑討論に1時間を用意しており、以下で述べるように、報告者の分野も報告のテーマも多岐にわたっていることに特徴があります。

これまでの報告を振り返ってみると、報告をいただいた方々の所属は環境学研究科に加えて文学部・比較人文、国際言語文化研究科、国際開発研究科であったり、専門分野も社会学だけでなく、地理学や環境政策、人類学、心理学、工学など、所属や専門分野を越えた研究者や院生であることがわかります。

また、大学も名古屋大学に限らず、これまでに弘前大学、千葉大学、法政大学、徳島大学、愛知県立大学、愛知江南短期大学、愛知教育大学、名古屋市立大学、椛山女学園大学、中京大学、金城学院大学、名城大学、岐阜大学、日本福祉大学、そして中国の南京大学とるように、日本各地、そして国外の研究者の方々にもご報告をいただきました。

さらに、報告いただいたテーマも、福祉、環境、都市、地域、NPO、NGO、コミュニティ、運動、住民組織、自治、政策、災害、交通、河川・流域社会、地場産業、まちづくり、エスニシティ、外国人労働者、教育など多岐にわたっています。大半の報告が日本の事象を取り上げるものですが、国外の社会的事象を取り上げたりフィールドとする報告も少なくありません。例えば、オーストラリア、中国、韓国、台湾イタリア、ドイツ、フランス、インド、ベトナム、カンボジア、インドネシアといった国々の事象を扱ったり、フィールドとする報告がありました。

この研究会のメリットは、身近な所で、気軽に、様々な分野の方々の研究を聞くことができ、議論に参加することができるということにあります。そして、それまで気がつかなかったことを発見することができ、そして「社会学」とは何かということを考えさせられるなど、多くの刺激を得ることができることにあります。

というのも、学会報告は、その分野での専門家の方々との議論を行える場として重要な意味を持っていますが、報告と議論の時間に限りがあるということに加え、研究者との交流も、所属学会の研究者の範囲や部会のメンバーにとどまることが多いように思います。もちろん、関心がある分野の研究会の情報を得て、他分野の学会に参加することは可能ですが、他分野の研究者との研究について触れる機会や研究上の交流は限られているといわざるをえません。

そして何よりも、同じ所属であっても、互いにどういった研究をしているのか、どういったことに関心があるのかなどについて知らないことが多いように思います。この研究会は、そういった意外に知らない同じ所属の院生や研究者が、各々の研究の報告をすることを通して、互いの研究を知り、議論する場をとしての役割をも担っています。

また、この研究会に私自身参加してから6年以上が経ちますが、様々な分野の、そして多様なフィールドやテーマの報告を目の前にして改めて思うのは、「社会」あるいは「地域」とはいったい何なのか、ということです。つまり、「社会」／「地域」は私たちが今生活するなかで築いている人間関係や所属している集団、直面している社会的問題等に見出すものをいうのか、あるいは自分自身が研究として目の前にしている対象に見出すものをいうのか。私自身、自分が今生活している中にしか、あるいは自身が研究している対象を通してしか「社会」／「地域」が見えていない、あるいは「社会」／「地域」を見ていないのではないか、ということに気がつきます。

テーマや分野が異なれば、そこで取り上げられる「社会」／「地域」の形、あり方が違ってみえます。所属や分野の異なる研究者の交流を兼ねたこの研究会は、言ってみれば自分が漠然と抱いている、あるいは限られた「社会」／「地域」を、改めて再考することのきっかけになっているように思います。この点に研究会の一理を見出せるならば、特定の分野や領域、テーマにこだわらず、開かれたこの研究会は、発足時から掲げる「知の創造」を開く場としての積極的な意義をもっているように思います。

最後に、もっと多くの研究者や院生の方々に、この研究会の存在を知ってもらい、参加してもらい、交流を深める場として活用してもらい、この研究会が「知の創造」の場として、各々の研究を豊かなものとし、今後の研究の活路を見出していただけるような場になっていければと思います。

IV 博士論文をふりかえって

博士論文をふりかえって

名古屋文理大学健康生活学部准教授
中村 麻理

2010年3月に『食育』のシンボル構造と集合行為をめぐるダイナミクス—日本のスローフード運動とJA食農教育に注目して—で博士(社会学)の学位を取得いたしました。指導教員である丹辺先生には、ここまでの道のりを終始丁寧にお導きいただきました。先生への感謝の気持ちは言葉で表すことができないほどです。また、副査の労を賜りました河村先生、青木先生、地理学講座の高橋先生には、ご多忙にもかかわらず拙稿をご精査いただき、貴重なご指摘を頂戴いたしました。そして、社会学講座の西原先生、田中先生、黒田先生、上村先生には、論文作成セミナーおよび論文提出資格審査セミナーをはじめと